

2020年6月7日(日)礼拝メッセージ

聖書箇所：ヨハネ 15章 18～27節（P216）

タイトル：「世があなたがたを憎むなら」

ヨハネの福音書 15章からお話ししています。きょうは、その4回目となりますが、「世があなたがたを憎むなら」というタイトルでお話しします。18節に、「世があなたがたを憎むなら」とあります。イエス様は、前回のところでは素晴らしい約束を与えてくださいました。それは、あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したということです。それは何のためですか。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるためです。その実とは救われる魂のこと、救いの実のことでした。それは彼らの力によるものではありません。神の力、聖霊の力によるのです。ですから、そのために祈るようにと勧められていたのです。あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはすべて、父が与えてくださいます。素晴らしいですね。私たちには、このような約束が与えられているのです。

しかし、それは簡単なことではありません。なぜなら、そこには迫害があるからです。苦難があります。きょうの箇所には、迫害とか、憎むという言葉が何回も出てきます。まず18節には、「**世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。**」とあります。19節にも、「**もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。**」とあります。20節にも、「**人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。**」とあります。また23節にも、「**わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいます。**」とありますし、24節にも、「**もしわたしが、ほかのだれも行ったことのないわざを、彼らの間で行わなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今や、彼らはそのわざを見て、そのうえでわたしとわたしの父を憎みました。**」とあります。25節の言葉も合わせると、この箇所だけで9回も遣われています。ピリピ 1:29には、「**あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。**」とあるように、私たちの信仰生活というのは、キリストを信じることで受ける恵みと同時に、キリストのために受ける苦しみもあるのだということ覚えておかなければなりません。そうでないと、そのような苦難に遭った時、どうしてこのようなことが起こるのかと失望落胆し、信仰から離れてしまうことにもなりかねません。ですから、クリスチャン生活にはこの世から憎まれることがあるということ、イエス様は予め教えられたのです。

いったいなぜクリスチャンはこの世から憎まれるのでしょうか。イエス様は、ここでその三つの理由をお話しなさいました。それは第一に、イエス様ご自身が憎まれたからです。イエス様が憎まれたのであれば、イエス様に従うクリスチャンが憎まれるのは当然のことです。第二のことは、クリスチャンはこの世のものではないからです。もしこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、クリスチャンはこの世のものではなくキリストのもの、神のものです。だから、世はクリスチャンを憎むのです。そして、三つ目の理由は、この世がクリスチャンを憎むのは、

まことの神を知らないからです。まことの神を知っていたなら、キリストを憎むことはしなかったでしょう。なぜなら、キリストは神から遣われた方なのですから。

ですから、結論は何かというと、世がどんなにあなたを憎んでも、キリストにしっかりととどまり、キリストを証ししましょう、ということです。

I. イエスご自身が憎まれたから (18)

まず、第一の理由から見ていきましょう。いったいなぜクリスチャンは憎まれるのでしょうか。なぜなら、主イエスご自身も憎まれたからです。18節をご覧ください。「世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。」

この「世」とは、神に敵対する世界のことで、聖書は、この世は悪魔の支配の下にあり、神に敵対するものであると言っています。たとえば、14:30 で主は、「わたしはもう、あなたがたに多くを話しません。この世を支配する者が来るからです。」と言われました。「この世を支配する者」とは悪魔のことです。悪魔がこの世を支配しているのです。元々、この世界は神によって造られました。神がこの世界を造られた時、その造られたすべてのものをご覧になり、「見よ、それは非常に良かった。」(創世記 1:31)と言われました。ですから、この世界は元々すばらしいものだったのです。しかし、最初の人アダムとエバが悪魔の誘惑に負けて罪を犯したことで、全人類が悪魔の支配の下に置かれることになってしまいました。それゆえ、この世は神を認めません。ピリピ 3:19 に、「彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。」とあるように、彼らは自分に都合の良いものを神とするようになりました。また、人間の力を誇り、人間には無限の力がある。コロナだって大丈夫。みんなで力を合わせれば必ず乗り越えられると、人間の力を誇るようになりました。その一方で、道徳的にはどうかというと、良くなるどころかますます悪くなり、平気で人を誹謗中傷したり、自分の欲望を満たすために人を騙したり、人の財産やいのちまでも奪うようになってしまいました。オレオレ詐欺は後を絶ちません。次から次に新しい業を繰り出してきます。これが神から離れた世界であり、この世の現実です。

しかし、神はこの世を愛し、御子イエス・キリストを遣わしてくださいました。それは御子信じる者がひとりも滅びることなく、永遠のいのちを持つためです。主イエスがこの世に来られると、「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ 1:15)と言われ、神の国の福音を宣べ伝えられました。様々な病気で苦しんでいる人を癒し、悪霊を追い出し、すべての町々、村々に行って神の国の福音を伝えられたのです。するとどうでしょう。そこには、主イエスを信じる人と信じない人の二つに分かれました。イエス様を信じない人たちのトップはユダヤ教の指導者たちでしたが、彼らはどうしたかということ、イエス様を歓迎するどころかイエス様を憎み、迫害しました。それはイエス様をご自分を神としたからです。イエスは言われました。

「わたしと父とは一つです。」(ヨハネ 10:30)

「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、「わたしはある」なのです。」(ヨハネ 8:58)

それを聞いたユダヤ人たちはどうしましたか。彼らは怒り、神を冒瀆したとってイエスを石打ちにしようとしました。しかし、群衆の手前それができないと思った彼らは、偽りの証言によってイエスを罪に定め、十字架につけて殺してしまったのです。彼らとしては「してやったり」でしたが、しかし、それこそが、永遠の昔から世を救うために定めておられた神の救いのご計画でした。神は、罪を知らない方を私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちがこの方であって神の義となるためです。それが十字架です。誰がそのようなことを考えることができるでしょうか。だれもできません。しかし、神にはできます。神にはどんなことでもできるのです。

このように、主イエスがこの世に来られた時、イエス様を信じない人たちはイエス様を憎みました。これはイエス様だけのことではありません。イエスを信じるすべての人に言えることです。あなたがたがわたしを選んだものではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るためです。しかし、それはまさに狼の中に羊を送り出すようなものでした。いつ襲われるかわかりません。なぜなら、世は彼らを憎むからです。でも心配しないでください。イエス様ご自身もそうだったのですから。彼らよりも先に憎まれました。イエス様が憎まれたのであれば、イエス様に従うクリスチャンが憎まれるのは当然のことではないでしょうか。

イエス様は彼らを伝道に遣わすにあたり、そのことを前もってお話しされました。そうでないと、そういうことが起こった時、「こんなはずじゃなかった」とがっかりして、信仰から離れてしまうことにもなりかねないからです。

先日、ある方からお電話をいただきました。お会いしたことはありませんが、以前、結婚の相談で何度かお話したことがある方でした。長年、ある県の養護教諭として働いておられましたが、職場の方から辞めてほしいと言われたのか、そうせざるを得なかったのかわかりませんが、辞めることになりました。次の仕事をどうしようと祈っていたところ、牧師になるのはどうだろうという思いが与えられ、いくつかの神学校で学びました。しかし、どこからも招聘がないというのです。仕方なく千葉県のある教会にオファーしたところ、これこれの条件でしたらお願いするかもしれないと言われ、今その結果を待っているとのことでした。もしだめだったら、ある教団にと言わせたところ、その教団の神学校で学べば卒業後はその教団関係の教会に赴任できるというのでそのようにしようと考えているんですがどう思いますか、ということでした。

どう思いますかって、牧師になるというのはすばらしいことですが、誰でもなれるわけではありません。というのは、牧師は職業ではなく主から与えられた賜物と召命によるからです。もし、一つの職業と考えたらどうなりますか。続けていくことはできないでしょう。思うように伝道が進みません。教会の方からもいろいろなことを言われます。自分の限界も感じるでしょう。そのような中でどうやって続けて行くことができるでしょうか。初めは牧師謝儀なんてどうでもいいと思っても、だんだん割に合わないと思うようになります。それでも、その働きを続けていくことができるとしたら、それは主のあわれみと主がそのように召してくださったからという召命があるからです。そうでなかったら続けていくことなんてできません。こんなはずじゃなかったとなるでしょう。

ですから、教会の牧師になりたいと思うなら、まず、今置かれている現場でしっかりと主に仕えることです。そうすれば、周りの方々から認められるようになるでしょう。その先に牧師とか伝道者の働きがあるのです。牧師の謝儀とか牧師の休日といったことはどうでもいいということではありませんが、そういうものは後からついてくるものであって、それありきということになると、こんなはずじゃなかったということになるのではないでしょう。

それは、私たちの信仰生活も同じです。私たちがイエス様を選んだのではなく、イエス様が私たちを選び、私たちを任命してくださいました。それは私たちが行って実を結ぶためであり、私たちがイエスの名によって祈るなら、何でも父が与えてくださるためです。

しかし、それは祝福だけではありません。祝福と同時に苦しみも賜りました。聖書が教えていることは、あなたがたは世にあって苦難があるということです。16:33をご覧ください。ここには、「**あなたがたは、世にあって苦難があります。**」とあります。苦難があるんです。すべてが祝福というわけではありません。「しかし」なんです。「**しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。**」。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出すことができます。なぜなら、主イエスは、世に勝利されたからです。この方がともにおられるのだから、勇気を出すことができます。私たちは、このように言われたイエス様の言葉をしっかりと心に留めておかなければなりません。そして、たとえ世に憎まれることがあっても、そのことで驚いたりするのではなく、私たちよりも先にイエス様が憎まれたことを思い、心を備えておきたいと思うのです。

Ⅱ. この世のものではないから (19-20)

クリスチャンはなぜ迫害されるのでしょうか。二つ目の理由は、クリスチャンはこの世のものではないからです。19節と20節をご覧ください。「**もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。しもべは主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。彼らがわたしのことばを守ったのであれば、あなたがたのことばも守ります。**」

もしクリスチャンがこの世のものであったなら、世はクリスチャンを愛したでしょう。しかし、クリスチャンは世のものではありません。それで、世はクリスチャンを憎むのです。私たちは以前、この世に属していました。ですから、神がどう思うかなんて全く関係ありませんでした。自分の思いのままに、自由奔放に生きていました。みんなやっていることだもの、ちょっとくらいならいいだろう。バレなければいい、そういう感覚で生きていました。人様に迷惑をかけなければいいじゃないですか。自分の人生なんだから、自分で好きに決めて何が悪いんですかと、すべて自分の思いのままに生きていたのです。それが生きる基準でした。

しかし、キリストを信じたことで生きる基準なり、価値観が変わりました。もうこの世のものではなく、神のものとなったからです。キリストがこの世から選び出してくださいました。ですから、この世の常識とか自分がどう思うかといったことよりも、神が願っていることは何か、何が良いことで神に受け入れるのかということが生きる基準となりました。

ジェームズ・ローガン氏は、アメリカ連邦議会議員として国に仕え、司法委員も務めたクリスチャンです。彼のワシントンへの道は平坦ではありませんでした。母親は十代の頃、バーテンの男に妊娠させられ、生まれたのがジェームズです。バーテンは妊娠の事実を知ると、すぐさま彼女を捨てました。母親には彼を育てる経済力は無く、彼は祖父母に育てられました。

母親の所に戻った頃、母親はアルコール依存症の男と結婚していました。しかし、間もなく離婚。そんな環境に育った彼は高校を中退します。そして、麻薬の売買、拳銃強盗などの問題を起こす連中と、いつも付き合っていました。

しかしジェームズは、かつて祖父から物事の善悪と、目標をもってそれに向かうことの大切さを教わっていたので、意を決して学校に戻り大学へ進みます。そして法律学校で学び検察官となり、州議会議員、判事、連邦政府議会議員として国に仕えます。ある日、彼はエレベーターの中で出会ったクリスチャンのジョイに導かれてクリスチャンになります。その後、その女性と結婚します。ジェームズ・ローガン氏は、自分の人生を大きく変えた、前向きに生きることのすばらしさや、信仰の力について伝えるために、自分の半生を本にしました。彼は、キリストと出会った時に与えられる、五つの変化について語っています。

金銭に対する価値観が変わる

今、多くの人はお金の奴隷になって、お金のためなら何でもするというような風潮があります。しかし、キリストを信じる時、与える喜びを知ります。「受けるよりも与える方が幸いです。」というイエス・キリストのことばを実感するようになります。

追求すべき目標が変わる

自分の利益だけを追及する生き方から、人々を助け、神の栄光を現すような生き方へと目標が変えられます。

物事の見方が変わる

物事の見方が否定的なものから、肯定的なものへと変えられます。「すべてのことについて感謝できる」ようになります。「すべてのことが益に変えられる」と信じられるようになります。従って、人生のあらゆる出来事に対して前向き、肯定的、創造的な態度を取ることができるようになります。

性格が変わる

物事の見方が変わると、当然生活が変えられていきます。救われた魂は、キリストの人格を徐々に映し出すようになって行くのです。

人格が変わる

キリストに従うとき人格が築き上げられます。人格は性格とは違います。人格とは、分化や周囲の価値観に影響されない確信です。確信がある人は、人の言いなりになって利用されることはありません。自分の足で立ち、自分で判断するようになります。その確信は、神のことばである聖書の教えに基づくものです。

すばらしいですね、これは、ジェームズ・ローガン氏の場合ですが、イエス・キリストとの出会いによって、彼の人生は 180 度変えられました。人を恐れる生活から神を恐れる生活へ、自分の利益を追及する生き方から、人々を助け、神の栄光を現すような生き方へと変えられたのです。それは彼だけでなく、キリストのものとされたすべての人に言えることです。だったらみんなクリスチャンになったらいいのと思いますが、なかなかそういうわけにはいきません。世はキリストに敵対しているからです。つまり、私たちがこの世から憎まれたのは、私たちがもはやこの世に属しているのではなく、神に属する者となったからです。ですから、世と違う生き方をしているために憎しみや迫害を受けるとき、むしろ、私たちはイエスに属している者であることが証明されることになるのです。

主は、山上の説教の中でこう言われました。

「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。」(マタイ 5:10-12)

義のために迫害されている者は幸いです。なぜなら、天の御国はその人のものだからです。言い換えるなら、それによってその人が神に属していることが明らかになるからです。キリストのためにののしられたり、迫害されたり、ありもしないことで悪口雑言を浴びせられるとき、あなたがたは幸いなのです。それは、私たちがもはやこの世のものではなく、神の国に属する者となったという証拠でもあるからです。もちろん、クリスチャンが苦しい目に遭ったからと言っても、それが自分の落ち度や自分に責任がある場合は別です。あくまでも義のために迫害されたり、主イエスのために苦しみを受ける時のことですが、もしキリストのためにののしられたり、迫害されたり、ありもしないことで悪口を浴びせられることがあるとしたら、むしろそれは喜ぶべきことなのです。

20 節をご覧ください。ここには、「しもべは主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。彼らがわたしのことばを守ったのであれば、あなたがたのことばも守ります。」とあります。どういふことでしょうか。

私たちはキリストのしもべです。キリストのいのちという代価をもって神に買い取られました。ここには、しもべは主人にまさるものではない、とあります。主人とは誰ですか。イエス様です。私たちはキリストのしもべです。ですから、人々がキリストを迫害したのであれば、しもべである私たちを迫害するのは当然のことですが、その迫害は主人以上のものではありません。このことを覚えておかなければなりません。それは、私たちが疲れ果ててしまうことがないためです。ヘブル 12:2-4 にはこうあります。

「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。あなたがたは、罪と戦

って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません。』

私たちはどんな迫害に遭ったとしても、イエス様ほどの苦しみに遭うことはありません。イエス様は、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、辱めをもらともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。私たちは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなければなりません。それは、私たちが元気を失い、疲れ果ててしまうことがないためです。私たちの主は、私たちよりもはるかに大きな苦難に遭われたということを思うとき、不思議と勇気と力が与えられるのではないのでしょうか。だから、信仰の創始者であり完成者であるイエスから目を離さないようにしなければなりません。

Ⅲ. まことの神を知らないから (21-27)

この世がクリスチャンを迫害するのはどうしてでしょうか。その第三の理由は、まことの神を知らないからです。21 節から 27 節までに注目してください。21 節には、「しかし彼らは、これらのことをすべて、わたしの名のゆえにあなたがたに対して行います。わたしを遣わされた方を知らないからです。」とあります。

どうして世はクリスチャンを迫害するのでしょうか。それは、わたしを遣わした方を知らないからです。イエスを遣わした方とは誰ですか。そうです、それは父なる神、まことの神のことです。その方を知らないのです。たとえば、ユダヤ人たちはどうでしたか。彼らはイエスを迫害しました。彼らは神の民であり、聖書をよく知っていました。熱心に祈りをささげ、断食もしていました。それなのに、主がこの世に来られた時、主を受け入れたかというところではなく、何と十字架につけて殺してしまいました。なぜでしょうか?神を知らなかったからです。彼らは神の民であり、神の律法が与えられていましたが、本当の意味で神を知っていなかったのです。本当に神を知っていたのであれば、その神によって遣わされたキリストを拒んだりしなかったでしょう。ましてや、十字架に付けて殺すようなことはしなかったはずです。確かに彼らは宗教的に熱心でした。でも、それは形だけで中身がありませんでした。大切なのは中身がどうであるかということです。彼らは宗教的でしたが、まことの神について全く知らなかったのです。

22 節と 23 節をご覧ください。「もしわたしが来て彼らに話さなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今では、彼らの罪について弁解の余地はありません。わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいます。」

もしイエス様が来て彼らに話さなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。しかし、彼らはイエス様が語られたことを聞きました。イエス様は、ご自身が父なる神から遣わされた者であり、父なる神と一つであるということ、また、自分を見た者は父を見たのと同じであるということをお話されました。また、ご自分が十字架にかかって身代わりの死を遂げられることについても話されました。

「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」(ヨハネ 3:14-15)

それなのに、その方を信じなかったとしたら、そこにはもはやそこには弁解の余地はありません。

そればかりではありません。24 節をご覧ください。「もしわたしが、ほかのだれも行ったことのないわざを、彼らの間で行わなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今や、彼らはそのわざを見て、そのうえでわたしとわたしの父を憎みました。」

イエス様が話されたことを信じられないという人のために、イエス様は、彼らの間でわざを行われました。それは、ほかのだれも行ったことのないわざです。たとえば、このヨハネの福音書の中には 7 つのしるしが記されてあります。イエスがメシヤであることの証拠としての奇跡です。たとえば、①カナの婚礼では水をぶどう酒に変えました(2:1~12)。②王室の役人の息子の病気を癒されました(4:43~54)。③また、ベテスダと呼ばれる池では 38 年間も病気で伏せていた人を癒されました(5:1~18)。④さらに、5 つのパンと 2 匹の魚で、男だけで 5,000 人の空腹を満たされました(6:1~15)。⑤そして、舟を漕ぎあぐねていた弟子たちを助けるために、ガリラヤ湖の上を歩いて近づかれました(6:16~21)。⑥生まれつきの盲人の目も癒されました(9:1~41)。⑦最後は、死んで四日も経っていたラザロを生き返らせました(11:1~45)。

どれ一つとっても人間には不可能なわざです。しかし、主はこれをご自分が神から遣わされた者、メシヤであることの証拠として行われたのです。そして、ユダヤ人たちはそれを見ました。もし、イエス様が彼らの間でそれを行わなかったなら、彼らに罪はなかったでしょう。しかし、彼らはそのわざを見て、そのうえで主イエスと父なる神を憎みました。どうしてですか。25 節にはこうあります。「これは、『彼らはゆえもなくわたしを憎んだ』と、彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。」

「ゆえもなく」とは「理由もなしに」という意味です。彼らは理由もなしにキリストを拒んだのです。それはこの旧約聖書の預言が成就するためでした。旧約聖書の中に、そのことがちゃんと預言されていたのです。

それはこの時のユダヤ人だけではありません。私たちも同じです。確かに私たちはキリストから直接話を聞いたわけではありません。また、直接キリストのわざを見たわけでもない。しかし、私たちには聖書が与えられています。聖書を見れば、キリストのことば、キリストのわざを知ることができます。それなのに、キリストを信じないとすれば、それはこのユダヤ人同様、「ゆえなく憎んだ」ことになるのです。そういう意味では、現代の私たちにとっても、弁解の余地は全くありません。

このように、私たちはキリストによって選ばれ、世に遣わされた者ですが、世はあなたがたを憎みます。そのような時、私たちが覚えておかなければならないことは、私たちよりも先にイエス様が憎まれたということ、そして、そのように憎まれるということは、私たちがキリストに属するものになったという証明でもあるということ、そして、そのように世が私たちを憎むのは、彼らが神を知らないからであって、弁解の余地はありません。

こうした前提に立って、世があなたがたを憎むとき、どのような態度を取ったら良いのでしょうか。その結論が、26 節、27 節にあります。一緒に読みましょう。

「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてください。あなたがたも証しします。初めからわたしと一緒にいたからです。」

このことは、逆に言えば、こうした偏見と悪意の渦巻く中であって、クリスチャンは主を証ししなければならないということです。クリスチャンにはそのような使命が与えられているのです。でも、憎しみと迫害の中でどうやって証しすることができるのでしょうか。その鍵は26節にあるように、イエス様が父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊です。その方が来るとき、その方がキリストについて証ししてください。ですから、私たちはキリストを証しすることを止めてはいけません。それが、私たちに与えられている使命です。私たちはそのために選ばれたのです。それを自分一人でやらなければならないとしたら、自分の力でやらなければならないとしたらどうでしょう。できません。しかし、「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてください。」あなたが伝えるではありません。あなたは、聖霊とともに行って証しするだけです。そのとき、聖霊が知恵と力を与えてくださり、語るべきことを教えてください。迫害に耐える力も与えてくださいます。

ディビッド・リヴィングストンは、暗黒大陸アフリカへの宣教師として有名ですが、彼の1856年1月14日の日記には、「今日は私の16年間のアフリカ滞在中最大の危機を迎えた」と記しています。実は、彼ら一行を現地人が待ち伏せしていて、いのちをねらっているという情報が入って来ました。リヴィングストンの仲間は「行くのを止めよう」とか「迂回しよう」と提案しましたが、リヴィングストンは「私たちを守ってくださる方は、必ず守る紳士である。この紳士のことばを私は信じる」。そう言って、マタイの福音書28:20のことばを引用しました。イエス・キリストは、そこで、次のように約束しています。

「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

そして、リヴィングストンたちは予定通りのコースを白昼堂々と進んで行ったのです。待ち伏せしていた現地人たちは何かに縛られたように動けず、自分たちの目の前を過ぎるリヴィングストンたちをただ見送るだけでした。

わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてください。私たちも、世の終わりまで、いつもともにおられる聖霊が助けてくださると信じ、世が私たちを憎んでも、行って実を結ぶ者とさせていただきましょう。